

—文化財めぐり—

しょうふくじ

聖福寺の文化財を訪ねて



万寿山聖福寺（^{うしろやま}後山から）

日時 2020年11月28日（土）

コース 聖福寺境内（全日）

会場 長崎市文化センター

講師 宮川雅一（長崎万寿山聖福寺大雄宝殿修復協力会）

1. 聖福寺の創建と初代住持・鉄心道胖

聖福寺は、延宝5年(1677)に鉄心道胖(1641~1710年)が、時の長崎奉行牛込忠左衛門らの要請と援助を受けて、母方である唐通事家の財力によって、現在地の真言宗寺院・知覚院跡に創建した寺院です。

したがって、航海安全を祈願する媽祖廟で発足し、中国人の資金で建設・運営され、中国の黄檗山万福寺系の唐僧が住持となる建前であった興福寺・福濟寺・崇福寺のいわゆる唐三ヶ寺とは、多少趣を異にする黄檗宗寺院です。

初代住持の鉄心は、寛永18年(1641)10月24日に中国福建省漳州府龍溪県出身の中国商人である陳朴純と西村氏(松月院)との間に生まれ、早く父を失い、隠元・木庵に接して出家し、日中両語よくして木庵に仕え、宇治万福寺の役僧となります。

寛文11年(1671)に母の死で帰郷し、3年間の喪服後に前述のとおり聖福寺を創建しました。その後も木庵に呼ばれて本山に行き、後事を託されるが辞退し長崎に帰りました。元禄16年(1703)の飢饉に際しては、有名な崇福寺のそれに先立ち、数万人に粥を施しました。

宝永2年(1705)幕命により瑞福寺住持着任のため江戸に行き、翌年普山祝国開堂(住職の就任式)し、將軍徳川綱吉に面謁しました。同6年(1709)に綱吉が死去し、新將軍の家宣に面謁後、聖福寺に復歸。翌7年(1710)10月3日に世寿70歳で示寂し、後山の松月院に葬られました。

2. 聖福寺の特色と文化財

建物の配置・建築様式

建物の配置は、山門・天王殿・大雄宝殿(本堂)等が縦一線に並び、左右に座禅堂・庫裡を配する本山万福寺に倣い、朱丹塗りは極力避けていますが、蛇腹天井・半扉・土間の床など黄檗様式の特徴を有しています。

関帝祭

唐三ヶ寺の媽祖の祭りに対して、享保19年(1734)から毎年5月13日に関帝祭が挙行され、唐寺の名物行事として多くの参拝者がありました。天明4年(1784)からは正月13日に変更され、幕末まで続きました。

広東寺

安政の開国後、広東省出身者の参詣が多くなり「広東寺」と呼ばれ、檀家にも同省出身者が増加したが、太平洋戦争を前に多くが帰国しました。その関係で広馬場(現籠町の十善会病院の地)にあった広東会館の重修記念碑等が境内にあります。

山門(国指定重要文化財)

元禄15年(1703)に竣工。泉州堺の豪商・京屋宗休が寄進し、堺の大工である数本久兵衛たちが現地で用材を切り組み、海路長崎に運んで建造しました。扁額「聖福禪寺」は創建に先立ち寛文12年(1672)に亡くなる前年の黄檗宗開祖隠元が揮毫したものです。



山門(国指定重要文化財)

惜字亭（市指定有形文化財）

文字入りの紙などを焼却する煉瓦造り漆喰塗り六角形の炉です。長崎の赤煉瓦（こんにやくレンガ）は、安政5年（1858）ごろに来日したオランダ海軍機関将校ハルデスの指導によって製造されました。この惜字亭は中国人信徒の寄進によるもので、慶応2年（1866）に築造されました。



惜字亭（市指定有形文化財）

市川団十郎供養塔

天保6年（1835）七代目市川団十郎（当時七代目市川海老蔵）と嫡子八代目団十郎が長崎巡業時「先祖供養祈子孫蕃育」のために建立しました。平成25年（2013）に死去した十二代目市川団十郎も生前密かに普段着で参観に訪れています。

天王殿（国指定重要文化財）

宝永2年（1705）に上棟され、現在は長崎唯一の遺例です。山門建築のため来崎した泉州堺の大工薮本九兵衛ほか6名の大工が、完工後に居残って建築しました。正面中央に長崎の仏師宗英制作の「弥勒菩薩坐像（布袋）」、背面に「韋駄天像」を祀っています。



天王殿（国指定重要文化財）

石門（市指定有形文化財）

神仏分離令で金比羅神社となった崇岳無凡山神宮寺にあったものを明治19年（1886）に譲り受け移築しました。鉄心の師である木庵書の「華蔵界」の文字が中央要石に刻まれていることによります。神宮寺唯一の遺構として貴重なものです。

大雄宝殿（国指定重要文化財）

現在の建物は正徳5年（1715）の改築。工匠は長崎の楠原与右衛門、釉瓦は肥前武雄製です。半扉の桃が中国風で仏像仏具の多くは中国人の寄進によるものです。



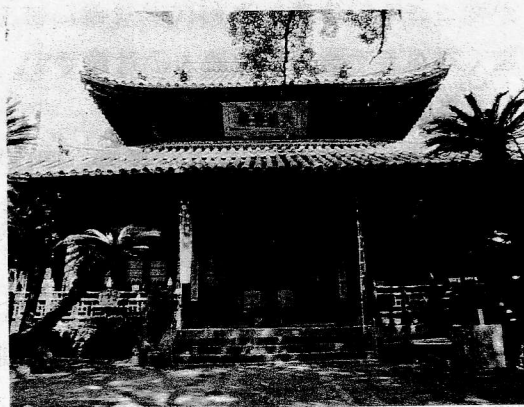
石門（市指定有形文化財）

釈迦三尊像

大雄宝殿の3像は、明時代に制作され、元禄11年（1698）に渡来しました。釈迦牟尼仏坐像が平成23年（2011）の九州国立博物館「黄檗展」に出陳され、三尊いずれの胎内にも金属製の五臓などがあることが判明し、世間の注目を浴びました。

媽祖像

原爆で大破し解体された観音堂にあったらしい媽祖像は現在、その順風耳像・千里眼像や広東会館関係媽祖像の侍女像とともに長崎歴史文化博物館2階に常設展示されています。



大雄宝殿（国指定重要文化財）

茶筌ちやせんづか

江戸初期の茶道の宗匠金森宗和好みといわれる茶室「鉄心軒」が書院近くに造られ、書院やここを使って茶会が多く催されています。昭和40年(1965)に建立され、毎年12月4日に茶道各派が相集い、茶筌供養が行われています。

瓦堀かわらべい

明治初年に周辺の塔頭たっちゅうが取り壊されたとき、その鬼瓦などで造られたとされています。地元の版画家である田川憲けんや文化勲章受賞画家の杉山寧やすし、光風会の曾宮一念そみやいちねんなど多くの画家が参観に訪れ、題材として優れた作品を残しています。

龍泉りゅうせん

瓦堀の裏手、唐竹の藪やぶの奥にある湧水。貞享4年(1687)鉄心が普請中に亀の形をした石を起こさせて発見し、名水として茶の湯などに利用されていました。今は飲み水には使われていませんが、現在も当時の姿を残しています。

志やがたらお春の歌碑し

昭和27年(1952)愛媛県出身商人で歌人の上野初太郎(からすみ店経営の檀家総代の同名の父君)が、お春が上筑後町(現在の玉園町)に一時在住していたことから、吉井勇いさむに短歌制作を依頼して建立されました。題字は言語学者である新村出しんむらいずるの書です。

八太郎墓碑

中国商人で文人の江芸閣と、有名な遊女袖笑こそうぎの妹遊女である袖扇との間に、文政13年(1830)2月20日に生まれて翌年2月10日に死んだ嬰兒の墓碑です。袖扇の頼みで、商用から帰った江芸閣が墓碑銘せんしよを撰書しました。もとは後山にありました。

鐘楼しょうろう (国指定重要文化財)

最近発見された棟札によって、先述した堺の大工数本と長崎の大工楠原が協力して建築、享保元年(1716)に竣工したことが判明しました。

梵鐘ぼんしょう (市指定有形文化財)

享保2年(1717)に長崎の鑄工安山弥兵衛国久が、元禄7年(1694)に鉄心の兄である唐通事の西村七兵衛の遺志を受けて子の作兵衛が母とともに寄進した初代の梵鐘に替えて鑄造。秀麗豪壮な音が遠く郊外まで響く長崎最大の梵鐘です。

涅槃図ねはん (県指定有形文化財)

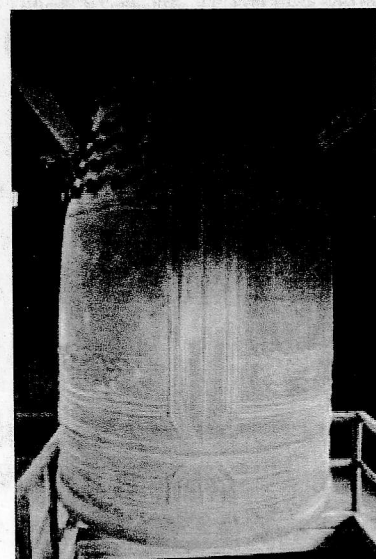
縦5.2m、幅3mの巨大な掛軸。中国明時代以降に浙派系画家が描いたのを、元禄2年(1689)春に本寺へ寄進されました。宝暦2年(1752)に表装替えがなされています。

黄檗三禅師次韻さんぜんしじいん (市指定有形文化財)

寛文9年(1669)冬、宇治万福寺の松陰堂に隠居していた隠元が最初の七言絶句しちごんぜっくを書き、2代住持の木庵が次韻し、翌年春に長崎の崇福寺にいた即非がさらに次韻した黄檗三傑の貴重な文書です。



鐘楼 (国指定重要文化財)



梵鐘 (市指定有形文化)